ミニシンポジウム 「ブラキシズムをどのように攻略するか」

Mini-Symposium 「How can bruxism be understood and treated」

座 長 総 括

坂東 永一

徳島大学歯学部歯科補綴学第二講座

Chairman's Recapitulation

Eiichi Bando

Department of Fixed Prosthodontics, School of Dentistry, The University of Tokushima

平成11年4月の第18回学術大会の際、同時に開催しました評議員会において本学会の在り方、運営方法について議論を行い数々の貴重な御提言をいただいた。

その実現の手始めとして新潟大学での第19回学術大会終了後、ブラキシズムについてのミニシンポジウムを開催した。ブラキシズムなどの習癖は、ストレスや咬合異常などに関連した神経筋機構の制御異常つまり活動性の亢進した状態、あるいは抑制系の活動が低下した状態であると考えられ、顎機能障害の重要な発症因子として注目されている。しかし、夜間睡眠時のブラキシズムに関しては、sleep laboにおいて発症時の咀嚼筋活動と脳波や心電図など生体信号との関連や、簡易測定装置を用いた患者自宅での測定など多くの研究がなされてきたが、現在のところその効果的な診断および治療法が確立されるまでには至っていない。

そこで今回のミニシンポジウムでは、「ブラキシズムをどのように攻略するか」をテーマとして、まず、1. 臨床の立場から「ブラキシズムがもたらすさまざまな影響と研究者に期待すること」を新潟県長岡市で開業されている依田洋明先生にお話ししていただいた。次いで、2. 基礎の立場から「ブラキシズムの生理学的背景」について新潟大学歯学部口腔生理学講座の山田好秋先生に、3. 臨床講座における研究の立場から「ブラキシズムに関する文献レビューおよび九州大学での研究の紹介」を九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座の市来利香先生に、4. 同じく臨床講座における研究の立場から「生体現象としてのブラキシズムの把握および徳島大学での研究の紹介」を徳島大学歯学部第二歯科補綴学教室の大倉一夫先生にそれぞれお話ししていただいた。

依田先生は日常多くの患者さんを診療されている臨床家としての立場から、非常にきれいな臨床症例のスライドをたくさんご呈示いただき、臨床においてどのようなことが問題であり大学の研究者に何を希望しているかを端的にまとめていただいた。山田先生は動物実験による咀嚼運動などの顎運動を研究されている第一人者であり、ブラキシズムの発症に関するメカニズムについ

て生理学的に現在明らかになっていることをお話しいただいた。市来先生、大倉先生はともにブラキシズムについての研究を学位論文としてまとめられた若手の研究者であり、世界的な研究の流れおよび自分たちがやってきた研究方法および成果について、また将来の展望について話していただいた。なお、各先生方の発表の詳細については後に記載されている抄録を参照して下さい。

各シンポジストの講演終了後、会場からも活発な質疑あるいは意見が寄せられた。質疑応答の主な内容を紹介する。まず、

基礎の立場からのパネリストである山田先生から「もっと脳に目を向けて、動物実験により運動系の解明に取り組むべきである」との提言があった。これに関連して「ヒトで実験を行うことは、種々の制約があり困難なので、脳に障害を持つヒトを注意深く観察することが一つの方法であるが、例えば中枢に問題のあることがはっきりしているオーラルディスクネジア患者に適正な咬合を付与することでその症状が改善することが知られており、末梢からの関与についても軽視すべきではない」との発言があった。側方ガイドとブラキシズムとの関連についての質問があり、「TMJへの負荷を軽減するのには有効と考えられる」との回答があった。スプリントの使用期間についての議論や、ブラキシズムの発症は中枢性のものであり治療に関しては薬剤が中心になるとの意見もあった。

最後に今回のミニシンポジウムをまとめる。ブラキシズムは顎機能障害だけでなく、咬耗などの審美面、補綴物の破損脱離、歯質の欠損など顎口腔系にいろいろな問題を引き起こしており、その発症には睡眠などに影響された大脳基底核など中枢神経の関与が大きい。診断面では被験者自宅での測定も可能であるテレメータ装置を用いて、顎運動などとの同時測定を行った研究結果から、従来行われてきた筋電図の発現パターンのみでは区分できないブラキシズムの種類があることなどが明らかになっている。しかし、ブラキシズムをすることの有無を含めその発現頻度と為害性との関係、患者に応用する場合の診断基準および治療方法など、今後技術的および診断基準の確立のために解決しなければならない問題は山積している。少なくとも、心疾患におけるホルター心電計に準ずるような診断方法が早急に開発されることが必要と考えられる。

このように、ブラキシズムの機序の解明と治療法の開発については現在具体的なゴールがまだはっきりとは見えない状況である。オーソドックスには先人達の研究を良く吟味してこれからの研究の方向を見極めるべきであろうが、難問を解決した研究者の中には、論文を読まなかったことが良かったという人もいる。現在提唱されている仮説に縛られることなく自由な立場からこの問題に関心を持ち続け、良く考慮した上で具体的な研究計画を立てていただければ展望が拓けるものと期待している。

今回のような催しは、日頃疑問に思っていることや考えていることを発表しあい、自分の考えをまとめるのに良い機会と思われる。今後もこのような会を開催していきたいと考えている。